

松 山 大 学 論 集
第 33 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 2 1 年 8 月 発 行

ペストとしての嫉妬
——『オセロー』序論——

八 鳥 吉 明

ペストとしての嫉妬

——『オセロー』序論——

八 鳥 吉 明

ルネサンス期には、貞淑な女性が、称賛の対象として、繰り返し表象される。他方、この表象と共時的に、性的嫉妬に駆られる男性や寝取られ亭主が、反復脅迫的に表象の対象となる。マーク・ブライトンバーグ (Mark Breitenberg) の言葉を借用すれば、男性の性的嫉妬や妻に対する不貞幻想は、この時代の家父長制に向けてかざされた「鏡」に映る姿である (Breitenberg 383)。初期近代イングランドにおいて、家父長制は女性性の理想的規範化に依拠して男性性を構築するが、そこで抑圧された女性の性 (セクシュアリティ) や欲望は、家父長制の構成的外部として、家父長制にとりつき、男性性に根絶しがたい不安を植えつける。その意味で、男性の嫉妬や不貞幻想は、家父長制に依存する男性性に内在する根源的不安を表出するものであり、家父長制の「症候」である (cf. Breitenberg 377)。見方を変えれば、貞淑な女性は、家父長制の「フェティッシュ」なのである (cf. Breitenberg 388)¹⁾

貞淑な妻に嫉妬する破滅的な夫を主人公にした、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『オセロー』 (*Othello*, 1603-04) は、まさにこうした時代に上演された悲劇である²⁾。本稿の目的は、『オセロー』を圍繞する嫉妬の言説を、『オセロー』を横断的かつ重層的に構成する文脈として検証することで、『オセロー』の新たな解釈のための準拠枠を提供することである。

ティツィアーノと嫉妬

ルネサンス期のベネチア派を代表するイタリア人画家ティツィアーノ（Tiziano Vecellio, 1488/1490-1576）が、1511年、パドヴァの聖アントニオ同信会館のために制作したフレスコ画の一つに「嫉妬深い夫の奇跡」（*Miracolo del marito geloso*）がある。画面中央には、左手で妻の髪を掴み、振り上げた右手には短剣を握る夫が描かれている。その足元には、地面に倒れ伏しながらも、身を守ろうと夫に向かって右手を差し出し、助命を懇願する悲痛な表情の妻がいる。このフレスコ画が描くのは、妻の不貞を疑う夫が妻を殺害する直前の劇的状況である。しかし、聖アントニオの聖人伝を典拠とするこのフレスコ画は、後日談も同時に描いている。画面右後方には、悲劇の後、妻の潔白という真実を悟った夫が、瀕死の妻の救済を願い、聖アントニオに跪く後姿が描かれている。その場面から、聖アントニオによる赦しと妻の奇跡的な復活が暗示される（Goffen 13, 21）。

ティツィアーノは「嫉妬深い夫の奇跡」と同時に「新生児の奇跡」（*Miracolo del neonate*）というフレスコ画も制作している。この奇跡も、妻の不貞に対する夫の疑いが端緒となっている。そこに描かれているのは、夫から不貞の嫌疑をかけられた妻の新生児が、聖アントニオの導きによって言葉を発し、自分の父が母の夫であることを証言する場面である（Goffen 16）。

両作品ともに、聖人による奇跡を描きながらも、そこには同時に、男性が女性に抱く性的不安とそれに基づく女性嫌悪が露呈している。特に「嫉妬深い夫の奇跡」は、奇跡を主題としながらも、聖アントニオは画面後景に退き、妻の復活という奇跡の描写は省略されている（Goffen 21）。前景で焦点となっているのは、妻に対する夫の暴力である（Goffen 22-23; Morosini 163）。つまり、このフレスコ画では、奇跡という宗教的主題が後退し、夫の嫉妬という世俗的主題が前景化している。

以降の嫉妬表象を考慮に入れると、この反転は示唆的である。ルネサンス期

においては、嫉妬に関する議論の高まりとともに、嫉妬深い夫とその暴力が繰り返し表現されることになるが、宗教的奇跡が介入する機会は稀である。それに付随して、様々な言説において、嫉妬は強い戒めの対象となる。さらには、そこから派生して、嫉妬を病、特に悪疫（ペスト）とみなす言説もうみ出されることになる。

嫉 妬 の 物 語

突然芽生えた夫の嫉妬が最終的に妻に対する暴力へと至る物語は、エリザベス朝からジェイムズ朝の作家や劇作家、そしてその読者や観客を強く魅了した（Maus 563-64; Vaughan 87-88）。ヴァージニア・メイソン・ヴォーン（Virginia Mason Vaughan）によれば、ジェームズ一世の時代の言説にみられる主要な感情の一つは嫉妬であった（Vaughan 77）。シェイクスピアが『オセロー』を執筆したのも、こうした言説空間のなかにおいてである。

実際、初期近代イングランドでは、嫉妬をめぐる様々な考察がなされていた。後に祝典局長となる廷臣エドモンド・ティルニー（Edmund Tilney, 1536-1610）が1568年に出版した『親交の花』（*The Flower of Friendship*）は、エリザベス女王に献呈された、理想的な結婚をめぐる対話篇である。そのなかで、結婚生活において夫が注意すべき項目が九つ挙げられるが、八番目の項目が妻に嫉妬しないことである。それは次のように説明される。「ストア学派の哲学者たちは次のように言っています。嫉妬とは自分だけが享受するはずのものを他の人が所有しているのではないかと考えるある種の不安だと。嫉妬心の苦悩より大きな苦悩はなく、それはまさに衣蛾が衣類を食い荒らすように、嫉妬に苦悩する心を食い尽くしてしまうのです」（Tilney 122）。ティルニーによれば、嫉妬とは、妻が他の男のものになってしまうかもしれないという夫の疑念、すなわち、寝取られ亭主になる不安である。さらに、嫉妬は最も深刻な苦悩であり、それは最終的に嫉妬する者自身を消尽させてしまう。ティルニーの「衣蛾（moth）」の比喻を用いた表現には、「それ（嫉妬）は緑の目をした怪物で、／

餌食にする肉を嘲笑うのです」(3.3.168-69)という『オセロー』のイアゴー(Iago)の言葉を彷彿とさせるものがある。

イングランドの政治家であり作家のジェフリー・フェントン(Geoffrey Fenton, 1539?-1608)が1567年に出版した『悲劇説話集』(*Certaine Tragical Discourses*)は、イタリアの作家マッテオ・バンデッロ(Matteo Bandello, 1485-1561)の物語集の仏語訳を底本に、英語に翻訳されたものである。その第四説話は、ティルニーの訓戒を守らなかった夫の逸話として解釈することができるかもしれない。

ギリシアのメッセニア生まれの紳士ピエロ・バルゾ(Pierro Barzo)は、トルコによるメッセニア攻略によって故郷を追われ、過酷な亡命生活を送るものの、運命に甘んじることなくイタリアのマントバに逃れ、礼節と武勲により歩兵団長へと立身出世し、同じメッセニア出身の美德と美貌に優れた女性を妻とし、娘にも恵まれるが、その後、妻と娘を残して亡くなってしまう。残された妻は寡婦として質素な生活を送るが、教会に行く姿が、徳と武勲に優れた高貴な紳士、アルバニアの騎兵団長ドン・スパド(Don Spado)の目に留まる。彼はその美貌と美德に魅了され、交際を求めるものの、断られる。そこで、スパドは彼女の兄の助力を求める。兄の働きかけに対し、彼女は娘のこと、そして前夫が死んで一年に満たないことなどを理由に紳士との交際に応じようとしませんが、さらなる兄の説得の結果、翻意し、結婚することになる。しかし、その後、スパドの思慮分別を欠いた過剰な愛は嫉妬に変わり、「彼女の顔を見たすべての男が彼の額に角を生やそうとしている」(Fenton 176)と考えるようになる。さらに、「妻は自分に対してと同様、他人に対しても愛情に物惜しみしない」(178)と考える。彼女は夫の疑いを晴らそうとし、嫉妬という「病(disease)」(178)を治そうとするが、むしろ状況は悪化する。しかし、彼女は忍耐をもって夫に対応する。ある日突然、夫は仕える主人に同行し、彼女のもとを去ってしまうが、夫はその主人と死別することで、さらなる憂鬱と絶望に陥る。事情が分からない彼女が夫に働きかけると、彼は事情を伝え、死の願望を述べたた

め、彼女は夫を慰め、さらには夫が死んだら自分も死ぬ覚悟でいることを伝え、彼は病の真相——仕えていた主人の死、自分の死によってもたらされる彼女との関係の終焉への危機、そして、最大のものとして、自分の死後、彼女が他の男のものになることへの不安——を語る。彼女は夫を安心させるために、夫の死に際しては自分も死ぬ覚悟でいることをあらためて伝える。しかし、それが彼女の命取りになる。その晩、二人がベッドに入って少しすると、彼は立ち上がって枕の下に忍ばせた短剣を取り、彼女を抱きしめ、キスしたのち、彼女の頭、首、腕、足を十数回刺した後、自分自身も刺す。死にゆく彼には「喜びと恍惚 (gladness and pleasure)」(189) の表情さえみられる。あまりに突然の事態に、彼女は臨終の告解も叶わないが、死後は前夫の墓に入れることだけを求めて死ぬ。一方、夫は悪魔にとりつかれたように、最後まで悔悛の情を示すことはない。物語の最後には、夫が妻について「自分の空想がつくり出したもの (the conceite of their owne fancie)」(190) を信じることの報いが語られ、夫に対しては妻を簡単に疑わないことの大切さ、女性に対しては知恵、従順、貞節の教訓が示される。

この逸話では、妻に対する夫の過剰な愛が嫉妬に変容し、妻を寝取られること、自分の死によって妻を失うこと、さらには自分の死後に妻が他人のものになることへの不安をうみ出し、最終的には妻の殺害、さらには夫の自尽に至る。現実的には、夫に不安を与えるいかなる要素も妻の側には存在しない。夫の嫉妬がそうした「幻想 (conceite)」をうみ出すのである。外国人の軍司令官が、嫉妬から無垢の妻を殺害し、自害に及ぶこの物語には、『オセロー』との類似性が指摘されている (Siegel 480)。また、この物語では、嫉妬が「病」として言及されていることも注目に値する。

イングランドの歴史家リチャード・ノールズ (Richard Knolles, 1550?-1610) は、1603 年に出版された『トルコの歴史』 (*The Generall Historie of the Turkes*) のなかで、トルコを舞台に類似の逸話を紹介している。イングランドの学者ロバート・バートン (Robert Burton, 1577-1640) が、1621 年に出版された『憂鬱

の解剖』(*The Anatomy of Melancholy*)のなかで、「ユーナス・バッサとその美しい妻マントの物語は『トルコの歴史』を読んだものにはよく知られている」と評した逸話である (Burton 330)。

オスマン帝国宰相のユーナス・バッサ (Ionuses Bassa) は宮廷で繁栄を誇り、人々からも愛され、尊敬されていたが、最愛の妻マント (Manto) に対して示す残酷さは人々を不快にさせていた。マントはギリシアの生まれで、自然の賜物である美貌とそれに見合う立派な性格に恵まれていた。最初の夫、ゼバリア (Zebalia) は自分の宝であり喜びとして彼女を戦争に同行させたが、彼は戦死し、不運にも彼女はトルコ軍の手に落ち、捕虜となってしまう。その彼女がバッサの目に留まり、彼はその美しさの虜になる。バッサは美しさと徳を兼ね備えた彼女を妻とし、他の妻以上に彼女を厚遇した。彼女も誠実に夫に仕え、しばらくは至福の時を過ごした。しかし、それが長く続くことはなかった。バッサは「自分を楽しませたものが他の人にも同じ満足を与えるのではないかと絶えず恐れる好色家のように、彼女を疑うようになった。しかし、自分自身の空想 (conceit) 以上に理由などなく、その空想も彼女の悪い行いではなく、自分自身の過剰な愛に基づくものであった」 (Knolles 557)。狂気じみた感情は彼のなかで増すばかりで、彼女が何を言おうが、何をしようが、もはや彼を満足させることはできず、彼は妻の不貞という根拠のない幻想に囚われていく。「この嫉妬深い男はかくも自分の空想 (conceits) を恐れていた」 (557)。しかし、彼は彼女への愛情を断ち切ることもできず、情欲に駆られた疑念で自分自身と彼女を苦しめることになる。マントは、理由もなく疑われる我が身を悲しみ、さらには不機嫌な夫の傲慢さと専制的な命令に疲れ、密かに夫のもとを離れ、故国に戻る決心をする。彼女は宦官の一人に決意を打ち明け、友人宛の手紙を託す。そこには逃走への協力依頼が記されていた。しかし、裏切り者の宦官は手紙を開封し、それを主人のバッサに渡してしまう。彼は激怒し、彼女を呼びつけ、すぐさま怒りにまかせて彼女の心臓を短剣で刺し、彼女を殺してしまう。皮肉にも、愛の対象であるマントの死によって、バッサは自分を苦しめ

ていた嫉妬から解放されるのである。

この逸話にも、夫が妻に対して抱く嫉妬とその帰結が描かれている。妻に対する夫の過剰な愛が嫉妬に変わり、夫は何の根拠もなく妻の不貞を疑うようになることから憂鬱の症状に陥る。不貞の幻想に囚われた夫は、最終的に妻を殺害するに至る。この逸話では、当時の読者に驚異／脅威とともに野蛮を連想させたであろうトルコが舞台となることで、嫉妬は他者化され、人種化されている。実際、ロバート・バートンは『憂鬱の解剖』において、地理的観点からみて嫉妬が顕著な場としてトルコを挙げている (Burton 303)。『トルコの歴史』が描く、妻への嫉妬と暴力を体現するオスマン帝国宰相の姿は、妻への嫉妬を契機に「トルコ化」し、妻を扼殺するムーア人オセローの姿と重なる (Vaughan 78-81)。

嫉妬は夫の過剰な愛から生じるだけではない。それは悪意ある第三者によって人為的に作り出され、増幅されることもある。1593年に出版された『正直者の新年の贈り物』(Tell-Trothes New-Yeaes Gift)には、嫉妬をもたらす八つの原因が指摘されているが、五番目の原因として挙げられるのが「悪意ある助言」である。「悪意ある助言が嫉妬の次なる原因である。悪意ある人が考えることは、邪悪な想像を喧伝することで不和を植えつけることだけである。それらは疑念に満ちた頭からうみ出され、潤色された偽善で述べられる。彼らは誠実な心と心の間に争いをもたらし、疑念とは無縁な人々を巧みに疑念に引き入れようとする。彼らは見込みで説得し、偽りの誓いで主張を立証しようとする。彼らは夫と妻の間に不和の木を植え、平和な家に不和の根を植える」(Furnivall 10)。「悪意ある助言」と連動するのが、嫉妬の六番目の原因として挙げられる、誤った報告に信憑性を与えるという発話行為である。「争いをもたらす人は、たんに誤ったものであれ、噂を喧伝して、自分が言ったことを立証することを憚らず、自分の悪行を善意の衣で覆い隠し、不正を潔白さの見かけで隠そうとする。彼らは、真実に満ちているかのように無駄口をたたき、中傷を述べては断言する。説得するためにはでっち上げ、立証するためには誓う

のだ。傷とは無縁な人の背中にいがを刺し、以前は平穏だった人の頭を疑念で満たす。愛に満ちたところに不和を据えることを楽しみ、誠実な友人の間に争いを見て喜ぶ。諍いを追い求め、嫉妬を尊ぶ」(10-11)。この記述は、「偽りの誓い」を立てながら、オセローに嫉妬という「怪物」を孕ませるイアーゴの発話行為の解釈として、そのまま応用することができるだろう。

フォークランド子爵夫人エリザベス・ケアリ (Elizabeth Cary, 1585-1639) の『メアリアムの悲劇』(*The Tragedy of Mariam*) は、1613年に出版された書斎劇 (closet drama) であるが、実際の執筆時期は1603年から1606年頃と考えられている (Wray 8-11)。『メアリアムの悲劇』は、女性がイングランドで執筆し、出版した最初の原作劇とされている。この劇もまた、妻に対する夫の嫉妬を主題の一つとしているが、この劇には「悪意ある助言」で嫉妬を煽動する人物が登場する。

『メアリアムの悲劇』は、ユダヤ王ヘロデ (Herod) の二番目の妻メアリアムの悲劇を扱っている。劇はメアリアムの独白で始まる。そこでは、後のローマ帝国初代皇帝オクタウィアヌス (Octavian) の元に出頭したヘロデがオクタウィアヌスによって処刑された、という知らせを聞いたメアリアムの心的葛藤が表白される。ヘロデの死は確証されていないが、彼女はそれを信じている。彼女はヘロデの愛情を理解している。しかし、その愛はあまりに強く、激しい嫉妬と不可分である。メアリアムは「ヘロデの嫉妬は／強力で、貞節そのものさえ変えてしまった」(1.1.23-24) と言う。そのヘロデの愛にメアリアムは応えてきた。しかし、彼女はヘロデを憎んでもいる。王位の継承を確実なものにするために、ヘロデが彼女の祖父と弟を殺害したからである。それゆえに、彼女の母アレグザンドラ (Alexandra) は、ヘロデの死の知らせを喜ぶ。ヘロデの妹サロメ (Salome) はメアリアムに好意を抱いておらず、ヘロデに対する彼女の不誠実さを責める。しかし、サロメ自身、夫コンスタバラス (Constabarus) と離婚して、愛人であるアラビアの王子シリウス (Prince Silleus of Arabia) と一緒にいる計画を隠し持っている。また、ヘロデにはフェロラス (Pheroras) と

いう弟もいる。フェロラスは、ヘロデの命令により、彼の幼子と結婚する義務を負わされているが、侍女グラフィーナ（Graphina）との結婚を望んでいたため、ヘロデの死の報告を受けた後、グラフィーナと結婚する。一方、コンスタバラスは、かつてヘロデにより死刑宣告を受けたババス（Babas）の二人の息子たちを匿っている。さらに、コンスタバラスは、シリアスからサロメを賭けた決闘を挑まれ、それに勝利するが、シリアスを殺すことはせず、むしろサロメによって利用されている彼に同情する。そうした状況のなか、大祭司アナネル（Ananell）が、ヘロデは生きていることを知らせる。サロメは喜び、動揺する兄フェロラスに対して、コンスタバラスとの離婚の実現に協力することの見返りに、グラフィーナとの結婚を取りなすと伝える。さらに、メアリアムがヘロデを毒殺しようとしている、という嘘をつくことで彼女を排除する陰謀を打ち明ける。一方、ヘロデが生きていることを知ったメアリアムに、以前の葛藤はなく、夫の生還に失望する。メアリアムからの歓迎を期待して帰還したヘロデであったが、フェロラスがグラフィーナと結婚したこと、また、ババスの息子を匿っていたことを理由にサロメがコンスタバラスと離婚したことを聞き、不快感をあらわにする。さらに、喜びを示そうともしないメアリアムの態度も彼の怒りを増大させる。そこに執事が飲み物を運んでくるが、それにはメアリアムによって毒が混入されていることを伝える。ヘロデは彼女を連行し、処刑するよう命じる。しかし、メアリアムへの愛を断ち切ることができないヘロデは、すぐに命令を撤回する。執事は不正を後悔し、メアリアムがヘロデを毒殺しようとした事実はなく、すべてはメアリアムを陥れるためのサロメの策略であったことを告白する。メアリアムの処刑を躊躇するヘロデに対して、サロメは、メアリアムと顧問官ソヒマス（Sohemus）の不義密通という嘘を捏造して伝える。嫉妬に駆られたヘロデは、メアリアムの処刑を命じ、命令は実行される。しかし、メアリアムの死の報告を受けたヘロデは、激しい後悔に襲われ、彼女の死に打ちのめされるのである。

この劇においても、妻に対する強い愛情と激しい嫉妬を同居させる夫が、妻

に対する嫉妬から、最終的に妻を殺害する状況が描かれる。ヘロデの嫉妬を正当化する不貞の要素は、メアリアムには存在しない。メアリアムを陥れ、排除しようとするサロメが、ヘロデの嫉妬を操作し、増幅するのである。サロメがメアリアムの悪意と情事を捏造し、ヘロデがその嘘を最終的に受け入れ、信じることで、メアリアムの殺害が実行される。サロメは、嫉妬を惹起する悪意ある助言者という点で、イアーゴーと類似する。この点を含め、同時期に執筆された『メアリアムの悲劇』と『オセロー』には、嫉妬の物語として類似する点が多いことが指摘されている（Carroll xviii；Vaughan 84-87）。

嫉妬のルネサンス

嫉妬についての本格的考察は、イタリア・ルネサンス期の人文学者フランチェスコ・ペトラルカ（Francesco Petrarca, 1304-74）の『わが秘密』（*Secretum*, 1347-1353）にも確認することができる。アウグスティヌス（Augustinus）との対話の形式をとるこの書物のなかで、ペトラルカは第一巻でアウグスティヌスに次のように語らせている。「事実、目に見える事物の無数の姿や像が押し寄せ、肉体の感覚に入り込む。ひとたびそれらが一つ一つ受け入れられると、魂の奥底でいくつも群れをなし、魂を圧迫し混乱させてしまう。魂はそれらに対応するためにつくられたわけではないし、これほど多くの醜悪な要素を受けいれることもできないからである。ここから幻想のペスト（*pestis illa fantasmatum*）が生じる。それはきみたちの思考過程をずたずたに切り裂き、唯一最高の光へと上昇するための明晰な瞑想に至る道を、その致命的な変幻性によって遮ってしまう」（1. 15. 5）。ここで「幻想のペスト」と呼ばれているのは「憂鬱」のことである。憂鬱に陥ると、魂は幻想に支配され、精神と認識に深刻な混乱が生じる。さらに、アウグスティヌスは第三巻で次のように言う。「きみはテレンティウス（Terence）の言葉のなかに自分自身の狂気、とりわけ嫉妬を認めることができるだろう。情念のうちでは愛が最もまさるように、愛においては疑いもなく嫉妬が最もまさる」（3. 7. 8）。情念において嫉妬を最も激しいもの、

さらに精神に致命的影響を与えるものとする考え方は、その後、嫉妬に関する諸言説のなかで継承されていく。

イタリア・ルネサンス期の詩人ルドヴィーコ・アリオスト (Ludovico Ariosto, 1474-1533) による叙事詩『狂えるオルランド』(*Orlando Furioso*, 1516) の第三十一歌冒頭にも、愛に影のようにつき纏い、愛を壊滅的に蝕む可能性を秘めた嫉妬に関する考察が提示されている。最初に述べられるのは、愛の至福の享受が嫉妬の不在を条件とするということである。「愛している状態より甘美で至福な状態が他にあるだろうか。愛の召使の生活より幸福で祝福された生活が他にあるだろうか——嫉妬として知られる、あの陰鬱な疑念、あの不安、あの苦悩、錯乱、情念に絶えず苦しみられない限り」(31.1)。それゆえ、いったん嫉妬に侵されると、その憂鬱は癒しがたい不断の苦しみをもたらす。「嫉妬は邪悪で有毒な傷で、それに対しては水薬も膏薬も呪文も魔法使いの護符も役に立たない。…それは残酷な傷で、犠牲者を苦しみの深淵に陥れ、絶望と死へと導く」(31.5)。しかも、嫉妬は錯誤によっても発生する。「ああ、不治の傷よ、それは正当な疑念に劣らず誤った疑念によっても、いとも簡単に恋人の心に傷口を開けてしまう。それは人を残酷に苦しめるため、思慮分別を曇らせ、その人を見分けがつかなくなるほど変えてしまう」(31.6)。嫉妬は妄想に基づき、理性を侵すため、当事者は錯乱の自己変容を強いられるのである。

『憂鬱の解剖』を1621年に出版し、その後、数度にわたって増補改訂を行っているロバート・バートンは、『憂鬱の解剖』の第三部第三章を嫉妬の分析にあてている。そのなかで、バートンは次のように書いている。「すでに示したように、あらゆる情念のなかで愛が最も激しく、この愛の憂鬱がもたらす苦い飲み物のなかでは、この私生児の嫉妬が最も強烈である。それは嫉妬が有し、もたらすあの異常な症状から明らかである」(321)。愛は最も激しい情念であり、憂鬱の原因となるが、憂鬱という症状においては嫉妬が最大の苦悩をもたらすという指摘は、ペトラルカの言葉を想起させる。

イングランドの詩人であり翻訳家のロバート・トフト (Robert Tofte, 1562-

1619/20) は、イタリアの人文学者ベネデット・ヴァルキ (Benedetto Varchi, 1503-1565) によって書かれた嫉妬に関する論考を英語に翻訳し、『嫉妬の紋章記述』(*The Blazon of Jealousie*)として1615年に出版している。そこには嫉妬について次のような記述がある。「嫉妬とは、愛と相まって…美しい人を自分だけで享受しようとする、ある激しい情熱的な欲望に他ならない」(Varchi 5-6), 「嫉妬とは、大切にしたい美しい人が望まぬ者によって享受されるのではないかという恐怖または疑念である」(12)。ヴァルキは嫉妬の原因として、愉悦、情念、所有権、名誉の四つを挙げているが(16)、情念について次のように述べている。「嫉妬は情念に由来する。最愛の女性を享受し、所有したいと願いながら、あたかも彼女が密かに他の男の愛人になってしまうかのように、彼女を失うのではないかとひどく恐れる時がそうである」(18)。これらはエドモンド・ティルニーによる嫉妬の議論と通底する。さらに、名誉に関する議論には、次のような記述がみられる。「南方民族と熱帯地域に居住する人々は非常に嫉妬深い。生まれつき愛にふけり、傾倒する習性があるからである。あるいは、妻や恋人が不貞の汚点で汚されることを大いなる不名誉で恥辱と考えるからである」(22-23)。『トルコの歴史』にみられた嫉妬の「人種化」が『嫉妬の紋章記述』では民族的記述の形態をとっているが、それらはともに『オセロー』においても顕著である。また、ヴァルキは嫉妬と「羨望 (envy)」の関係についても触れており、次のように述べている。「嫉妬が羨望のようなものであることに疑いはない。そして、羨望があるところには必ず嫉妬があるということにはならないが、嫉妬があるところには必ず羨望が続く。…それゆえに、プラトンは嫉妬する人を、愛による疑念のために他者に対して羨望や悪意を抱く人と定義している」(12-13)。このように、初期近代においては、嫉妬と羨望は類似の感情として同義的に扱われることがあった (Gundersheimer 323, 325)³⁾

イングランドの政治家であり哲学者でもあったフランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) は、1625年に出版された『随想集』(*The Essays*) 所収の「羨望について」(Of Envy) のなかで次のように書いている。「羨望と

いう感情に関して、一般に次のことを付け加えておこう。他のすべての感情のなかで、羨望が最もしつこく、継続的である。他の感情については、時折機会が与えられるだけだからである。それゆえ、「羨望は休日を取らない」とはよく言ったものである。それは常に誰かに働きかけているからである。また、愛と羨望は人を憔悴させることも認められている。そうしたことが他の感情では起こらないのは、それらが継続的ではないからである。それはまた最も下劣な感情であり、最も堕落した感情である。それゆえ、それは悪魔 (the devil) の固有の特性である。悪魔は「夜に小麦の間に毒麦を蒔く妬み深い者」と呼ばれている。羨望は狡猾に、闇のなかで、小麦のような良いものを害するように働く、ということが常に起こるからである」(Bacon 87)。羨望は「執拗」であり、それゆえに妬む者を消尽させる。それはまた、あらゆる感情のなかで最も邪悪な感情である。このように、嫉妬を巡る言説のなかで、ベーコンの羨望にもペトラルカやアリオストの嫉妬が残響している。加えて、ベーコンは、羨望が狡猾に働き、良いものに害を与えることから、羨望を「悪魔の固有の特性」として「悪魔化」している。これは、オセローへの嫉妬と羨望から、「悪意ある助言」という「毒麦」によって、オセローを嫉妬と羨望に陥れるイアーゴーが「悪魔 (a devil)」(5.2.284) と呼ばれることに、一つの視座を提供する⁴⁾。

ペストとしての嫉妬

ルネサンス期の嫉妬表象には、ある特徴がみられる。嫉妬に関する言説において、嫉妬は感染性の病という隠喩を用いて表現されることがあるのである。そこでは、嫉妬は「ペスト」とみなされる。

ルネサンス期には、古代ギリシア・ローマから中世を経て継承されてきた、四体液説が信じられていた。四体液説は、血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁を人間の基本構成要素とする「体液病理学」(humoral pathology)で、体液の比率で人間の気質が決まると考えていた。見方を変えれば、四体液説とは、感情を身体と存在論的に不可分にとらえる「体液心理学 (humoral psychology)」であり、

感情とは身体的現実であった (Paster 26, 50, 61)。四体液説という認識の枠組みのなかでは、嫉妬はもともと黄胆汁と結びつけられる「病」であった。

一方、ペストは、中世以降、しばしばヨーロッパで流行し、時に甚大な被害をもたらしていた。例えば、イングランドでは、1485年から1666年にかけてペストが絶えることはほとんどなかった。特に1584年から1597年にかけては、毎年国内各所でペストが発生し、イングランドが一定期間ペストの流行から免れたのは、1612年から1624年の期間と1654年から1664年の期間だけであった。死亡率の急上昇を伴う「ペスト大流行年」とされているのは、1498年、1504年、1505年、1509年、1511-21年、1523年、1535年、1543年、1563-64年、1589年、1592-93年、1603-11年、1625-26年、1636-39年、1641年、1643-47年、1665-66年である。このように、イングランドでは、ペストの脅威は常に存在し、ペスト流行は十六世紀と十七世紀を通して、死亡危機をもたらす最大の要因であった (Slack 67-69, 77; Totaro “Introduction” 9 and *Suffering* 2, 188)。

ペストの一般的症状としては、発熱、頭痛、呼吸困難、節々の痛み、倦怠感、卒倒、さらには、憂鬱、譫妄、譫言などが挙げられる (Barroll 77-78)。これらは「不安、悲嘆、疑念、奇妙な行動や身振り、激越な振る舞いや言葉」 (Barton 321) といった、嫉妬がもたらす憂鬱の症状と重なる部分がある。また、『オセロー』では、嫉妬に「感染」したオセローが、憂鬱の症状を示すだけでなく、「額が痛む」 (3.3.288) と言い、四幕一場では、「癲癇 (an epilepsy)」 (4.1.50) によるものとはいえ、卒倒することも印象的である。

先ほど確認したように、ペトラルカは『わが秘密』のなかで、憂鬱を「幻想のペスト (pestis illa fantasmatum)」と表現しているが、その憂鬱のなかで最も激しい苦悩をもたらすのが嫉妬であった。アリオストの『狂えるオルランド』においても、嫉妬について、次のような記述がある。「しかし、その地獄のペスト (l'infernal peste) によって病んだ心が感染され、汚染され、毒されると、幸せと喜びがついに到来したとしても、恋人を冷淡にしてしまう」 (31.4)。ア

リオストにおいても、嫉妬をペストの隠喩を用いて表現する言説が確認できるのである。

『嫉妬の紋章記述』のなかで、ベネデット・ヴァルキも、ペストの隠喩を介して嫉妬を次のように表現している。「嫉妬と呼ばれる、あの忌まわしい恐怖、地獄のような疑念、いやむしろ、不治のペスト (vncurable Plague), 致命的な毒」(Varchi 5), 「嫉妬がいかに悪質で有害なペスト (plague) であるか」(9)。そして、翻訳者のロバート・トフトは、エドワード・ディモック (Edward Dimmock) への献辞のなかで、「男のペスト (the Plague of Men)」をお見せすると述べている。トフトは、ヴァルキを翻訳するだけでなく、多くの注釈を付記しているが、そのなかで次のようにも書いている。「事実、私の考えでは…最も役立たずの人がいつでも嫉妬というこの感染性の病気 (infectious Disease) に最もかかりやすいのだ」(22)。ヴァルキ同様、トフトにとっても、嫉妬は感染する悪疫なのである。

ロバート・バートンも、嫉妬を次のように記述している。「それはより激しい情念であり、より猛烈な混乱であり、激烈な苦痛であり、情火であり、致命的な気難しさであり、生活の甘美さを損なう苦味であり、狂気であり、めまいであり、ペスト (plague) であり、地獄である」(Burton 321)。バートンは嫉妬を様々なものに喩えているが、嫉妬がペストであることを指摘している。他にも、バートンは、「地獄のペスト」(302), 「致命的なペスト」(305) と、“plague”という言葉を用いて嫉妬の考察を行い、最後にウェルギリウス (Virgil, 70-19 BC) の『アエネーイス』(Aeneid, 30?-19 BC) からの引用句を用いて、嫉妬に関する論考を次のように終えている。「格言に「神々よ、このような禍い／ペスト (pestem) を大地から遠ざけますように」とあるように、主よ、異端や嫉妬や精神錯乱から私たちをお救いください」(357)。ここでは、ペストという病を媒介にして、嫉妬は精神錯乱だけでなく異端と同列に扱われ、他者化されている。これは、『オセロー』においても確認することができる連想的繋がりである。

フランシス・ベーコンは、「公的な羨望 (public envy)」について次のように述べている。「それは伝染病 (infection) に似た国家の病気である。というのも、伝染病が健全なものに蔓延し、感染させるように、ひとたび羨望が国家のなかに入り込むと、それは国家の最善の行為さえ中傷し、悪臭に変えてしまうからである」(Bacon 86)。ここでは、国家を政治的身体ととらえ、羨望を嫉妬と同様、国家身体を蝕む伝染病とみなす観点が示されている。

こうした嫉妬とペストの比喩的連関、さらに、嫉妬／ペストと異端や国家身体との連想的繋がり、は、『オセロー』においても確認することができるものである。

シェイクスピアにおける嫉妬

シェイクスピアは、『オセロー』以外にもいくつかの劇で、妻に対する夫の嫉妬を描いている。十八世紀イングランドの文人サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-1784) は次のように述べている。「寝取られ亭主の角ほど、シェイクスピアが好んでいるように思われるイメージはない」(Johnson 186)。シェイクスピアの時代には、寝取られ亭主の額には角が生えるという俗説が流布しており、シェイクスピアの劇にもその表象が繰り返し登場する。本稿の最後に、『オセロー』以外のシェイクスピア劇における嫉妬表象をいくつか確認し、それらと『オセロー』との関係性を検討しておきたい。

『ウィンザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*, 1597-98) では、夫の嫉妬が喜劇的に描かれる。金欠で女好きの騎士サー・ジョン・フォルスタッフ (Sir John Falstaff) が、金と貞節を奪おうとフォード夫人 (Mistress Ford) とページ夫人 (Mistress Page) に同じ恋文を送るが、その試みは早々に両夫人の知るところとなり、二人はフォルスタッフに仕返しをすることにする。他方、二人の夫フォードとページも、フォルスタッフによって解雇された手下から、彼の企みを知らされる。フォードとページの反応は対照的で、ページは心配とは無縁だが、嫉妬深さで有名なフォードは妻を疑う。フォードはブ

ブルック (Mr. Brook) と偽りフォルスタッフに近づくことで、妻との不貞を探るが、フォルスタッフの自慢げな法螺話によって、彼の嫉妬はさらに掻き立てられる。フォルスタッフは次のように言う。「例の下司野郎、亭主のフォードってやつにはな、ブルックさん、これまで人間を逆上させてきたうちでも極めつけの狂った嫉妬の悪魔が乗り移っているぞ」(5.1.17-19)。フォルスタッフは、二度にわたってフォード夫人とペイジ夫人によって逆に騙されることになるが、結果的に、フォードの嫉妬心もそれに翻弄されることになる。最終的に、フォードとペイジは夫人たちから事情を説明され、フォードは妻に許しを請い、全員でフォルスタッフを懲らしめにかかる。

この劇では、フォードは妻の不倫に対する自分の疑念を確実なものにするために、ブルックと偽った姿で、フォルスタッフに次のように言う。「金があります、これをお使いください、お使いください、もっとお使いください。私の全財産をお使いください。ただし、そのかわりにお時間を少々割いていただき、フォードの女房の操を恋の手管で攻め落としてください。あなたの口説きの奥の手を使って、うんと言わせてください。他にできるものがいるとしても、あなたなら誰よりもたちどころにできるでしょう」(2.2.221-26)。フォードには、妻の不貞を恐れながらも、嫉妬に駆られて不倫の妄想に囚われるあまり、ブルックとして、かえってその実現を促し、そこから恍惚感を得ようとする倒錯性がみられる。その意味で、フォルスタッフがブルックに扮したフォードに語る言葉、「ブルックさん、あんたがフォードを寝取られ亭主にするんだよ」(3.5.127-28) は、フォルスタッフの意図を超えた正しさを持つ (Kahn 130)。この倒錯的衝動を悲劇的に増幅させたのが、オセローの姿であるとも言えるだろう。

『空騒ぎ』(*Much Ado About Nothing*, 1598) においても、夫になる予定の男の嫉妬が反復して示され、それが劇の展開上重要な要素となっている。この劇では、アラゴンの領主ドン・ペドロ (Don Pedro) の腹違いの弟ドン・ジョン (Don John) が、悪意から嫉妬を惹起させる人物として登場する。

メッシーナの知事レオナート (Leonato) の娘ヒアロー (Hero) に一目惚れした側近クロードディオ (Claudio) のために、ドン・ペドロが仮面舞踏会でクロードディオに扮してヒアローに求婚するが、ドン・ジョンはそれを兄ドン・ペドロが自分の情欲のために行ったことだとクロードディオに信じ込ませる。嫉妬のせいで顔色が「オレンジ」のように黄色くなった (2.1.270-71) クロードディオに対して、ドン・ペドロはその誤解を解き、婚礼を進めさせる。しかし、婚礼前夜、ドン・ジョンはまたしてもクロードディオとドン・ペドロを騙し、ヒアローが他の男と密会している現場を目撃したと思込ませる。結婚式の場でクロードディオがヒアローの不実を罵ったことで、ヒアローは失神するが、一計を案じた修道士フランシス (Francis) の助言により、ヒアローは死んだと公表される。その後、道化的な巡査ドグベリー (Dogberry) たちの活躍により、ドン・ジョンの陰謀が明らかにされ、悔悛したクロードディオはヒアローと結ばれる。

陰謀の手段として他者の嫉妬を操作する私生児ドン・ジョンは、イアーゴーを彷彿とさせるところがある。ドン・ジョンは陰謀の動機について次のように語っている。「これは俺の腹の虫の餌になるかもしれない。あの成り上がりの若造、俺の落ち目をいいことに榮譽をすべて手に入れた。もしやつをすくうことができれば、俺も救われるってもんだ」 (1.3.60-63)。「成り上がりの若造」とは兄の寵臣クロードディオのことである。また、ドン・ジョンは次のように言う。「やつらに恨みを晴らすためなら、何でもやってやる」 (2.2.28-29)。ドン・ジョンは、兄やクロードディオが自分の政治的・社会的成功を阻んでいると考え、彼らを憎悪し、その失脚を狙っている。つまり、彼の動機は、兄とクロードディオに対する羨望であり、彼らに自分の享樂を奪われていることに対する復讐である。ドン・ジョンの試みは失敗するが、それを少なくともある程度まで成就させるのがイアーゴーであるとも言える。ルネ・ジラルール (René Girard) が指摘するように、『オセロー』という悲劇の主要な構成要素は、執筆年代が先行する『空騒ぎ』というこの喜劇にすでに存在しているのである (Girard 290)。

『冬物語』(*The Winter's Tale*, 1609)では、シチリア王リオンディーズ(Leontes)の妻に対する嫉妬が描かれる。自分では説得できなかった、親友のボヘミア王ポリクシニーズ(Polixenes)への逗留延長の要請を、妻のハーマイオニ(Hermione)が成功させると、リオンディーズは突然、二人の不義密通を疑うようになる。嫉妬に駆られたリオンディーズは、忠臣カミロー(Camillo)にポリクシニーズの毒殺を命じるが、ハーマイオニの貞節を信じるカミローは、ポリクシニーズに事情を打ち明け、共にボヘミアへ逃れる。しかし、その逃亡により、リオンディーズの疑念は確信に変わり、妊娠中のハーマイオニを投獄し、獄中で生まれた王女パーディタ(Perdita)を捨ててくるよう、臣下のアンティゴナス(Antigonus)に命じる。ハーマイオニを死刑にすることを目的として開いた法廷にアポロンの神託が届き、ハーマイオニの潔白が宣告されると、リオンディーズは神託を否定するものの、その直後に王子マミリアス(Mamillius)の衰弱死の知らせが届き、それに続いてハーマイオニが倒れて運び出されると、リオンディーズはようやく自分の嫉妬の過ちに気づくことになるが、そこにハーマイオニの計報が伝えられる。劇の悲劇的諸相が和解に向かうのは16年後、生き延びた王女パーディタを軸にした展開によってである。

不倫の疑念に襲われたリオンディーズは、ハーマイオニとポリクシニーズが親交と儀礼に基づき互いの手を取る様子を見て、思わず次の言葉を口にする。「熱すぎる、熱すぎる！」(1.2.108)この言葉は、デズデモーナの不貞を疑うオセローが彼女の手を取って発する言葉、「熱い、熱い、そして湿っている」(3.4.39)と共鳴する。「漏れやすい器(leaky vessel)」という形象を女性認識の枠組みの一つとする初期近代イングランドの家父長制的言説において、熱さと湿気は女性の猥褻さを暗示するものであった(Fisher 47, 50)。また、リオンディーズはハーマイオニとポリクシニーズの姦通という疑惑に直接的証拠を求めようとはしない。彼は次のように言う。「あの二人の親密さは、／これほど明白に推測できたためしはない、／この目で見ていないだけだ。証拠は不要、／目

撃していないだけだ。他の状況証拠をすべて組み合わせれば、／やったことにつながる」(2.1.175-79)。状況証拠だけで妻の不貞を信じるのは、「目に見える証拠 (ocular proof)」(3.3.363) を求めながらも、最終的にイアーゴーが仕掛けた状況証拠の罠に嵌り、その歪像を通してデズデモーナの不貞を見たと確信するオセローと同じである。リオンディーズの嫉妬においては、オセローの場合と同様、幻想が現実を凌駕するのである。

『冬物語』では、嫉妬を「病」とする見方が示されている点も注目に値する。カミローはリオンディーズに「陛下、そのように病んだお考え (this diseased opinion) は／お治してください。それも今すぐに、／大変危険ですので」(1.2.294-96) と諫め、ポリクシニーズにも「この世には、／ともすれば私たちを錯乱に陥れる病 (a sickness) があります。／その病名は申し上げられませんが」(1.2.380-82) と述べる。「病名」は嫉妬である。嫉妬は人の精神を錯乱させる「病」であるという認識が、『冬物語』では確認されるのである。

夫が妻に抱く嫉妬が描かれるのは『シンベリン』(Cymbeline, 1609-10) でも同様である。ブリテン王シンベリンの意思に反して王女イノジェン(Innogen)と密かに結婚したことで、紳士ポステュマス(Posthumus)は追放され、ローマに渡る。ポステュマスはイタリアの紳士ヤーキモー(Iachimo)とイノジェンの貞節をめぐる賭けをする。ブリテンに渡ったヤーキモーは、ポステュマスがローマで放蕩を重ねていると嘘をつき、イノジェンを口説き落とそうとするが、むしろイノジェンの叱責を受ける。その夜、ヤーキモーはトランクに身を隠してイノジェンの寝室に忍び込み、寝ている彼女の腕からポステュマスの贈り物であるブレスレットを抜き取り、胸のほくろを見つける。この二つの状況証拠を突きつけられたポステュマスは、イノジェンの不貞を確信して彼女を「娼婦 (whore)」(2.4.128) と呼び、従者ピザーニオ(Pisanio)にイノジェンの殺害を命じる。イノジェンの潔白を信じるピザーニオは、彼女に事情を打ち明け、男装してローマに行くよう勧める。一方、ピザーニオからの通知で、ポステュマスはイノジェンが死んだものと思い込み、後悔の念から生きる意味を

見失い、ブリテン軍とローマ軍の戦争のなかで死ぬことを決意する。しかし、イノジェンの旅が劇の紛糾したあらゆる事態を徐々に収束させることにつながり、最終的にイノジェンとポステュマスの結婚も正式に許される。

この劇では、嫉妬が「伝染病」として表現されている。イノジェンの不貞を告発し、その殺害を命じる、ポステュマスからの手紙を受け取ったピザーニオは次のように言う。「ああ、旦那様、異国のどんな伝染病 (a strange infection) が／お耳に入り込んだのでしょうか」(3.2.3-4)。ここには嫉妬を「伝染病」とする認識がある。加えて、この伝染病の感染源は「異国」(イタリア)とされることで、嫉妬という伝染病はブリテン(イングランド)という国家身体の外部に排除される。また、それは言葉によって耳から感染する。ピザーニオは次のようにも言っている。「どんな腹黒いイタリア人が、／手と同様に舌でも毒を操り、こんなにも易々と／あなたに信じ込ませたのですか？」(3.2.4-6)。ここには、嫉妬とは外国から侵入する伝染病であり、言葉を介して耳から感染し、精神と身体を蝕む毒である、という考えが集約的に示されている。こうした考え方は、『オセロー』において、より重層的に展開されている。

『十二夜』(*Twelfth Night*, 1601)では、妻に対する夫の嫉妬が描かれることはないが、イリリアの侯爵オーシーノ(Orsino)は、伯爵家の女主人オリヴィア(Olivia)への愛が報われないどころか、オリヴィアが侯爵の小姓シザーリオ(Cesario)——男装したヴァイオラ(Viola)——を愛していることを思い知らされると、次のように言う。「私にその気があれば、／死の淵に立つエジプトの盗賊のように、／愛するものを殺すだろう。野蛮な嫉妬(a savage jealousy)が、／高貴な香りを放つこともある」(5.1.113-16)。ここでは嫉妬が、エジプト人という異民族の特性として他者化され、「野蛮な嫉妬」(5.1.115)と呼ばれている。見方を反転させれば、嫉妬はオーシーノをエジプト化し、野蛮な他者とする。この「野蛮な嫉妬」がムーア人という異民族の他者に投影された姿、それがオセローである、と言うこともできるだろう。

以上にみてきたようなルネサンス期の「嫉妬」にまつわる諸言説を一つの準拠枠として『オセロー』という劇を考察した場合、どのようなことが明らかになるだろうか。その問題に関する論考は、稿を改めて行うことにしたい。

＊本論は、2019年度松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。

注

- 1) マーカス・ノードランド (Marcus Nordlund) は、家父長制下での正統性 (嫡出性) への関心に加え、梅毒という病が、妻の不貞への不安、寝取られ亭主に対する強迫観念、そして夫の性的嫉妬という、初期近代イングランドを特徴づける現象をもたらした、と指摘している (153-54)。エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552/53-1599) の『妖精の女王』 (*The Faerie Queene*, 1590, 1596) 第一巻第四篇に登場する「好色 (Lechery)」は、嫉妬を連想させる「緑の衣 (a greene gowne)」 (1.4.25.1) を身に纏い、「髓を腐敗させ、脳を衰弱させる、万人が咎める悪疾」 (1.4.26.7-8) を患っているが⁹、この病は梅毒であるとも考えられている (Hamilton 69)。
- 2) シェイクスピアの劇の創作年代については、スティーヴン・グリーンブラット (Stephen Greenblatt) を編集長とする『ノートン版シェイクスピア全集』 (*The Norton Shakespeare*) に従う。
- 3) ブラッドリー・J・アイリッシュ (Bradley J. Irish) は、初期近代イングランドで感情表現を指す語として使用された “obtrectation” という単語に着目し、その語と概念が、「羨望」と同時に「嫉妬」の言説と密接に関連していたことを示している。この語は、中傷や誹謗を意味する一連の語と連想関係を有することで、「羨望」にまつわる言説を構成する一要素であると同時に、他者が自分の所有物を享受することに対する悲しみという不快な感情を意味することで、性愛の対象を喪失し、それを他者が享受することに対する不安から生じる「嫉妬」と類似した感情を表すために使用される言葉でもあった (Irish 117-26)。
- 4) 嫉妬と羨望は他者との競合から派生する感情であり、羨望が自己の萎縮と反動的憎悪を特質とするのに対し、嫉妬は愛の喪失に基づく、という精神分析的立場から、オセローとイアーゴをそれぞれ嫉妬と羨望の観点から分析する解釈もある (Lansky 25-47)。

引用文献

- Ariosto, Ludovico. *Orlando Furioso*, translated by Guido Waldman, Oxford UP, 1998.
- Bacon, Francis. *The Essays*, edited by John Pitcher, Penguin, 1985.
- Barroll, Leeds. *Politics, Plague, and Shakespeare's Theater: The Stuart Years*. Cornell UP,

- 1991.
- Breitenberg, Mark. "Anxious Masculinity : Sexual Jealousy in Early Modern England." *Feminist Studies*, vol. 19, no. 2, 1993, pp. 377-98.
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*, edited by A. R. Shilleto, vol. 3. 1893. AMS, 1973.
- Carroll, Clare. Introduction. *William Shakespeare's The Tragedy of Othello, the Moor of Venice : and, Elizabeth Cary's The Tragedy of Mariam, the Fair Queen of Jewry*, edited by Clare Carroll, Longman, 2003, pp. xvii-xxii.
- Cary, Eliabeth. *The Tragedy of Mariam, the Fair Queen of Jewry*, edited by Ramona Wray, Bloomsbury, 2012.
- Fenton, Geffray, translator. *Certaine Tragical Discourses of Bandello*, vol. 1, David Nutt, 1898.
- Fisher, Will. *Materializing Gender in Early Modern English Literature and Culture*. Cambridge UP, 2006.
- Furnivall, Frederick James, editor. *Tell-Trothes New-Yeaes Gift*. N. Trübner, 1876.
- Girard, René. *A Theater of Envy : William Shakespeare*. 1991. St. Augustine's Press, 2004.
- Goffen, Rona. *Titian's Women*. Yale UP, 1997.
- Greenblatt, Stephen, Walter Cohen, Jean E. Howard, and Katharine Eisaman Maus, editors. *The Norton Shakespeare : Based on the Oxford Edition*. Norton, 1997.
- Gundersheimer, Werner. "'The Green-Eyed Monster': Renaissance Conceptions of Jealousy." *Proceedings of the American Philosophical Society*, vol. 137, no. 3, 1993, pp. 321-331.
- Hamilton A. C. Commentary. *The Faerie Queene*, by Edmund Spenser, Longman, 1977.
- Irish, Bradley J. "The Varieties of Early Modern Envy and Jealousy : The Case of *Obtrectation*." *Modern Philology*, vol. 117, no. 1, 2019, pp. 115-126.
- Johnson, Samuel. *Samuel Johnson on Shakespeare*, edited with an introduction and notes by H. R. Woudhuysen, Penguin, 1989.
- Kahn, Coppélia. *Man's Estate : Masculine Identity in Shakespeare*. U of California P, 1981.
- Knolles, Richard. *The Generall Historie of the Turkes*. London, 1603. *Early English Books Online*, name.umd.umich.edu/A04911.0001.001. Accessed 28 Mar. 2021.
- Lansky, Melvin R. "Jealousy and Envy in *Othello* : Psychoanalytic Reflections on the Rivalrous Emotions." *Jealousy and Envy : New Views about Two Powerful Feelings*, edited by Léon Wurmser and Heidrun Jarass, Routledge, 2014, pp. 25-47.
- Maus, Katharine Eisaman. "Horns of Dilemma : Jealousy, Gender, and Spectatorship in English Renaissance Drama." *ELH*, vol. 54, no. 3, 1987, pp. 561-83.
- Morosini, Sergio Rossetti. "New Findings in Titian's Fresco Technique at the Scuola del Santo in Padua." *The Art Bulletin*, vol. 81, no. 1, 1999, pp. 163-64.
- Nordlund, Marcus. "Theorising Early Modern Jealousy : A Biocultural Perspective on Shakespeare's

- Othello*.” *Studia Neophilologica*, vol. 74, no. 2, 2002, pp. 146-160.
- Paster, Gail Kern. *Humoring the Body: Emotions and the Shakespearean Stage*. U of Chicago P, 2004.
- Petrarca, Francesco. *My Secret Book*, edited and translated by Nicholas Mann, Harvard UP, 2016.
- Shakespeare, William. *Cymbeline*, edited by Valerie Wayne, Bloomsbury, 2017.
- . *The Merry Wives of Windsor*, edited by Giorgio Melchiori, Bloomsbury, 2000.
- . *Much Ado About Nothing*, edited by Claire McEachern, rev. ed., Bloomsbury, 2015.
- . *Othello*, edited by E. A. J. Honigsmann, rev. ed., Bloomsbury, 2016.
- . *Twelfth Night, or What You Will*, edited by Keir Elam, Cengage Learning, 2008.
- . *The Winter's Tale*, edited by John Pitcher, Bloomsbury, 2010.
- Siegel, Paul N. “A New Source for *Othello*?” *PMLA*, vol. 75, no. 4, 1960, p. 480.
- Slack, Paul. *The Impact of the Plague in Tudor and Stuart England*. Clarendon, 2003.
- Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*, edited by A. C. Hamilton, Longman, 1977.
- Tilney, Edmund. *The Flower of Friendship: A Renaissance Dialogue Contesting Marriage*, edited by Valerie Wayne, Cornell UP, 1992.
- Totaro, Rebecca. “Introduction.” *Representing the Plague in Early Modern England*, edited by Rebecca Totaro and Ernest B. Gilman, Routledge, 2010, pp. 1-33.
- . *Suffering in Paradise: The Bubonic Plague in English Literary Studies from More to Milton*. Duquesne UP, 2005.
- Varchi, Benedetto. *The Blazon of Iealousie*, translated by Robert Tofte. London, 1615. *Early English Books Online*, name.umd.umich.edu/A14277.0001.001. Accessed 28 Mar. 2021.
- Vaughan, Virginia Mason. *Othello: A Contextual History*. Cambridge UP, 1994.
- Wray, Ramona. Introduction. *The Tragedy of Mariam, the Fair Queen of Jewry*, by Eliabeth Cary, Bloomsbury, 2012, pp. 1-69.